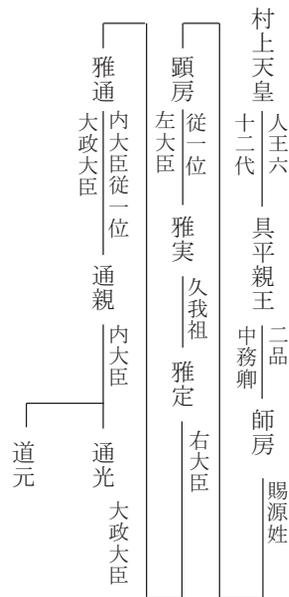


- ・句読点を適宜配し、読み下しの便宜を図った。
- ・旧字体・異体字は新字体に、旧仮名遣いは現在の仮名遣いに改めた。
- ・元号は脇に西暦を補った。元号や主語などは適宜「」で補った(推測を含む)。
- ・省略された人名や難義語などは()で補足した(推測を含む)。
- ・割注は(〜)で記した。
- ・典籍名・禅籍名には『』を付した。

一卷目

〔一四〇〕永平寺開祖、道元禪師は、村上天皇の裔、久我内大臣通親公の子。母は、九条撰政関白基房公の女。其の始め、懐妊の日、空中に声有り。曰く、「妊むところの者は、間世の大聖なり」と。

附系図



〔二四〇〕正治二年庚申。正月二日。祖(道元)、降誕せり。相人(相好を見る人)見て、駭きて曰く、「骨相、奇雋珍しく勝れている(こと)にして、七処(両掌・両足下・両肩・うなじ)平満にして、眼に重瞳(二つの瞳)あり。必ずや人天の師(衆生の導師)とならん」と。

〔二四一〕建仁三年癸亥。祖、年四。李嶠が『百詠』を読む。老儒碩学、歎じて曰く、「真に畏るべきの大器なり」と。建永元年丙寅。祖、年七。『毛詩』『詩経』『左伝』『春秋左氏伝』を読む。略、大義に通ず。

〔四四〇〕承元元年丁卯。祖、年八。冬、母亡す。哀毀、極めて至る。喪に居るに際して、適々、香煙の散滅するを見て、深く世の夢幻を悟る。是に始めて、脱塵の志を決す。

〔四五〇〕二年戊辰。祖、年九。「世親著『俱舍論』を閲す。人、道元禪師に」その義意味を咨う。則ち、「道元禪師の」答釈は流るるが如し。或いは、「眠らないように」股に針し、頤に纏して、以て自ら励む。

〔四六〇〕舅、撰政関白師家公、祖の英敏を愛し、養いて己が子となし、以て撰政の職を継がしめんと議す。祖、卒かに肯んぜず。自ら謂らく、「阿母の逝しより、深く求道の願を發す。復た、曷ぞ利名に意かんや」と。是に於いて、愈々、螢雪を勤むるは四年。

〔四七〇〕建曆二年壬申。祖、年十三。春夜逃げて、木幡の山荘に遊ぎ、遂に叡嶽比叡山に至り、良觀法眼の房に投じて、懇ろに出家を求む。觀(良觀)聴かず。祖曰く、「始め、吾が母の逝くなり。吾れに命ずるに、出家を以てす。昊天、極まりなし。希らくは、「母の」遺命を奉ぜんなり」と。觀、其の志の奪うべからざるを知りて、之を聴す。乃ち、横川首楞嚴院に属籍せしむ。觀は、九条基房公の子にして、祖の舅なり。

〔四八〇〕建保元年癸酉。祖、年十四。四月九日、僧正公円(天台座主)に就いて剃髮す。尋ねて、登壇、受戒す。孜々として研窮す。昼夜を舎さず。

〔四九〇〕二年甲戌。祖、年十五。叡山に在りて、經論を涉獵す。適々、疑いを献じて曰く、「頭密二家、各々説く、本来本法性、天然自性身。己に怎麼そのような、則ち三世の諸仏、甚だに憑いて、発心して、道を求むるや(本来悟っているのなら、なぜ諸仏に菩提心を發して道を求めるのか)と。之を質するに著宿(学徳の優れた老人)、皆、答うることを能わす。

〔五〇〇〕時に、三井(三井寺)の公胤(天台座主、觀心に名ありと稱す。乃ち、往きて、之疑問を咨う。胤公胤曰く、「此の問難し。若し之を詳せんと欲せば、須らく建仁寺に往きて、之を榮西に問うべし」と。祖、直ちに建仁に到りて、前疑を咨い質す。西榮西、答えて曰く、「三世の諸仏、(仏性の)有ることを知らず。狸奴(猫の類)、白牯(牛の類)、却つて、「仏性の)有ることを知る」と。祖、言下に省あり。

〔五一〇〕三年乙亥。祖、年十六。七月、榮西示寂す。其の嗣、明全に從いて、菩薩戒を受く。壁觀の暇、大蔵(經)を閲するは二回。益々、三蔵に粹らなり。祖の建仁に在ること、都計九年。

〔五二〇〕貞応二年癸未。祖、年廿四。明全に從いて、宋に入る。二月、洛(東京)を出ず。三月、纒を解き(出航する)、四月、明州に達す。五月、尚、碇宿す。一日、育王山阿育王山の典座(禅院の食事係)、某甲なる者あり。舶裡に到る。祖と弁道文字の義を論ず。時に宋、寧宗嘉定十六年なり。

〔五三〇〕秋七月。祖、天童山に於いて無際(無際了派)に參ず。其の僧臘の序を失するを見て、祖、屢々之を正す。肯んぜず。遂に朝廷に上表して之を質すは再びす。寧宗(南宋皇帝)、其の仏門に忠あるを感じて、竟に順臘排列の詔を下す。宋土禅林の宿弊、始めて革正を得るは、祖の力なり。是に於いて、「道元」の平名は、朝野を動す。

〔五四〇〕嘉定十七年甲申。祖、年廿五。已に無際の許可を得るは数回。適々、一僧の袈裟を披するに、阿含の法の如くなるを見て、竊に感泣して謂えらく、「昔、其の教を見、今、其の行を見る。実に訪道の益なり」と。亦た如琰(浙翁如琰・思卓盤山思卓・元肅の諸名徳)に參ず。宝慶元年乙酉。祖、年廿六。育王山に登り、成桂知客禅院の接待係と其の廊壁に図する所の龍樹円月の相を論ず。

〔五五〇〕祖、遍く諸師に參ず。未だ其の意に厭足(満足)する師に遇わず。自ら謂らく、「再び無際に參ぜんに如ず」と。將に天童に帰らんとす。途にして、其(無際の)計(計報)を聞く。慨然として、忽ち、東帰の想を生ず。時に僧老璣なる者あり。告げて曰く、「天下の宗匠、誰か浄老(如浄)に邁わん。頃、勅を奉じて、天童に住す。但け。時を失すること勿れ」と。浄祖は、長翁如浄禅師。乃ち、祖の師なり。

〔五六〇〕五月朔(一日)。浄祖、嚮を具す。待つ所の有る者が如し。侍僧、之を異奇異とす。浄祖の曰く、「吾れ昨夜、悟本大師(曹洞宗祖、洞山良价)を迎うるを夢む。今日、異人の来たること無きを得んや」と。

〔五七〇〕祖、再び天童に上る。始めて浄祖を妙高台(天童山の方丈(住持の居所)の呼称)に拝す。浄祖曰く、「仏々祖々、面授の法門、現成せり」と。祖、焼香礼拝して、乃ち庁簡を

奉じて、以て請益の悃を述べる。既にして浄祖、左右に謂して曰く、「此の(弟)子、定めて悟本の後身か。必ずや吾が宗を興さんと。」

者あり。告げて曰く、「天下の宗匠、誰か浄老(如浄)に邁わん。頃、勅を奉じて、天童に住す。祖、時を失すること勿れ」と。浄祖は、長翁如浄禪師。乃ち、祖の師なり。

〔二八四〕浄祖、一日、僧堂に在りて、坐睡の僧を責めて曰く、「參禪は須らく身心脱落なるべし。只管に打睡して什麼をなすに堪えんや」と。祖、傍らに在りて大悟す。直ちに方丈に上り、所解を呈す。浄祖、之を印可す。九月十八日、遂に仏祖正伝戒を受く。

〔一九四〕祖、独り江西に往く。晩に荒村に入る。路に猛虎の牙を鼓して食わんと欲するに値う。祖、直ちに拄杖を擲向して、巖上に避けて坐す。虎、嘖りて、杖尾を嚙る。而して失糞して去る。巖を下りて之を視て、始めて杖頭の龍と化して、身、其の頭上に坐することを知ら。宋土の禪林、崇稱して此の事を図画して、伝え以て、之を偉とす。

〔二〇四〕祖、天童に還るの半途、身体困羸。死ぬが幾しなり。忽ち老嫗(老婆)有り。来たりて一丸薬を与う。祖、乃ち醒蘇す。道正(道元)と共に入宋した木下道正庵(庵)之を問う。「老嫗は」曰く、「日東稻荷の神なり。聊か急を救うのみ。道正其の方を乞うて得たり。今の解毒丹は是なり、道正は木下家の先先祖にして、祖の伴なり。」

〔二二四〕宝慶三年丁亥。祖、年廿八。一神童有り。認めて曰く、「道は己に成り。時は己に至れり。宜しく郷に還りて、無勝幢を豎つべし。此れに淹留(留)留まるること莫れ」。祖問う。「汝を孰誰とか為るや。」一神童曰く、「韋將軍なり。」

〔二二四〕祖、將に郷に還らんとして、浄祖を辞す。浄祖、芙蓉指祖(禅宗四十五祖芙蓉道楷、如浄は五十祖、道元は五十一祖)の衣及び、自讃の頂相を出して、囑して曰く、「汝、異域の人を以て、之を授けて信を表すなり。将来、城邑聚落に住すること莫れ。国王大臣に近づくこと莫れ。須く深山幽谷に居し、一箇半箇を接得すべし。吾が宗をして、断絶せしむること勿れ」と。

〔二三四〕是の夕、祖、始めて圓悟(臨濟宗の高僧圓悟克勤)と多からず。只是れ等閑に天童先師(如浄)に見えて、当下

の『碧巖集』を得る。乃ち、之を手写す。夜、已に半に垂らんとす。自ら其の全を得ざらんと揣る。忽ち一白衣の神人あり。助けて之を写す。未だ曉ずして、業を卒う(終える)。神は吾が白山権現なり。世に之を「一夜碧巖」と称す。今、加州(加賀国)大乘寺に在り。

二巻目

〔二四四〕翌早、便船を得る。纜を解いて、招宝山下を過ぐ。忽ち偉人の船舷に立つあり。云わく「吾れは是れ大権修利菩薩なり。師の祖印を佩て還ることを知る。希らくは、扶桑(日本)に從て、永く法幢を護せん」と。言ひ畢りて去る。

〔二五四〕一日、黒風に遇う。南溟に満船、色を失う。祖、苦上に坐して、『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』を誦す。忽ち觀音大士の蓮葉に乗りて、洋中に浮くを見る。俄なる頃、風波恬然たり。日ならずして、肥後州河尻に着く。乃ち我が安貞改元丁亥の季冬なり。

〔二六四〕二年戊子。祖、年二十九。洛に入りて建仁寺に寓すること三年。寛喜二年庚寅。祖、年三十一。深草に閑居す。偈に有りて云う、「生死は隣れむべし、雲の変更し、迷途覚路、夢中に行く。唯だ一事を留めて、醒めて猶記す、深草の閑居、夜雨の声」。又、草庵、偶詠、和歌三十余首有り。

〔二七四〕越前の牧。波多野雲州藤の義重、嬖妾あり、愛顧尤も厚し。夫人、之を嫉む。陰かに殺害せんことを謀るとも、其の便を得ず。適々、義重、京に入る間に、終に殺して之を池底に沈む。既にして其の厲(靈)に怪を為す。池中に出没し、或いは叫喚の声あり。義重、惘然として計無し。遂に祖に就いて、濟拔迷いから救うことを請う。祖、乃ち、授くるに、菩薩戒血脈を以てす。忽ち空中に声有り。恩を謝して、天に上り去る。今、その池を称して血脈池と曰う。

〔二八四〕天福改元癸巳。祖、年三十四。弘誓院大納言教家(九条教家、尼正覺と興聖寺を造る。祖を請いて、之興聖寺)に居しむ。詔有りて額を賜う。規律肅整、実に本朝叢林の権輿なり。嘉禎二年丙申。祖、年三十七。冬十月望(十五日)、開堂す。衆に示して云わく、「山僧、叢林を歴ること多からず。只是れ等閑に天童先師(如浄)に見えて、当下

に眼横鼻直なるを認得して、人に瞞かせられず。便乃空手にして郷に還る、所以に一毫の仏法無し。任運且つ時を延ぶ。朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。雲収まり山骨露われ、雨過ぎて四山低く、畢竟して如何ん。良久して云わく、「三年、一閏に逢い、雞(にわとり)、五更に向かいて啼く」。

〔二九四〕仁治三年壬寅。祖、年四十三。化道、増開く。一時の傑、覺心(由良興国寺開祖)、長西(京九品寺主)、良忠(鎌倉光明寺開山)、而下も、戒を受け、道を問う者、二千余人。近衛撰政(近衛兼経)及び、縉紳士庶(身分の高い者と低い者)、争い請し、或いは、肩摩袂接(肩や袂が触れ合うように混み合うさま)して到る。法を問ひ、益を請う者、虚暇有ること無し。祖、頗る誼(喧しいこと)を厭うの色あり。上堂して云わく、「直ちに道本来無一物と道うも、誰か知る、遍界の皆て蔵さざることを」と。興聖に住するは、都て十一年、其の垂訓の語、載て『正法眼蔵』及び『永平』広録中に在り。

〔三〇四〕寛元年癸卯。祖、年四十四。屢々、徒に謂して云さく、「吾れ本上国の浩壤を避く。今、復た頻に公卿に接するは、豈に吾が意ならんや。況や天童先師(如浄)をや。別れに臨みて誠約有り。希う所は、衣を払い、遠く青山白石の間にいらん」と。是に於いて、縉素黒と白、転じて僧俗、山林園地を以て請する者、数十所、未だ祖の意に可ならざ」と。一日、「波多野義重、越前を以てして請す。祖云う。「吾が先師は大宋、越州の人なり。私に其の州名の同じきを喜ぶ。吾れ夫れ往かん。七月、既に望み速やかに、退鼓を擲ちて、越山に入る。則ち重巖疊嶂、甚だ祖の意に適う。今の吉祥山(永平寺)是なり。」

〔三一四〕二年甲辰。祖、年四十五。房舎、未だ成らず。然れども、開示警策す。勉めて虚日無し。七月、堂宇落成す。乃ち傘松峰大仏寺と称す。上堂して云わく、「独存無倚、脱落全真。混然として、萬象の中に明歴々たり。卓爾として、不疑の地に活鱗々たり。月の水に印して痕なきが如く、風の空に行きて、動ぜざるに似たり。恁麼に委悉事細かに詳しくするし、得て去らば、陋巷狭い巷)に騎らず、金色の馬、迴途却て破欄衫(破れた着物を着たり)」と。三年乙巳。

